The Nikkan Jidosha Shimbun
（第三種郵便物認可）
日刊自動車新聞　２００７年３月３１日（土）

卵の黄身は薄かった

DME自動車普及推進委員会事務局長　若狭 良治

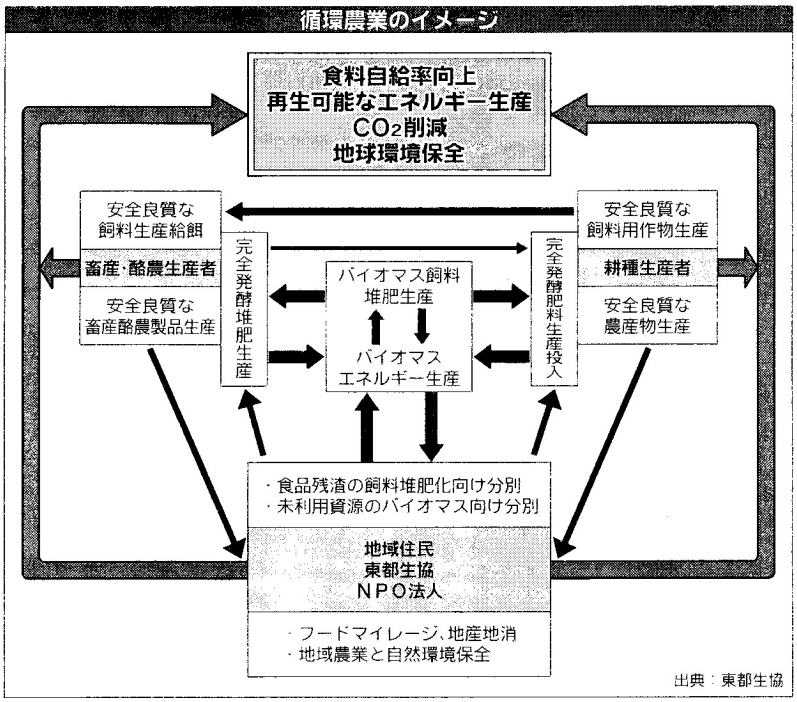
飼料用「米」で育った鶏卵の白い黄身

先月の本欄で「飼料用トウモロコシの高騰と「えさ米」について記述したが、今回はその続きに触れてみたい。

カラー写真ではないのでわかりにくいが、写真の卵は、鶏の飼料トウモロコシ（全飼料中の約70％）の代わりに「飼料用米」を混ぜた飼料で育てた卵である。アルファルファ（牧草の一種）を加えたので、少し淡い黄色であるが、一般の鶏卵と比べて、明らかに黄色みが薄い。アルファルファ黄身はさらに白くなるということである。

青森トキワ養鶏農協の石澤直士専務理事が「米」で育てた卵である。

仏像白昼夢
蔦　唐丸
（水墨画　F50号）



また、茨城県の「JAやさと（八郷）」の鶏肉生産部会の友常雅夫部会長からは、11年前から取り組んできた飼料用稲・麦の作付けとそれらの飼料で飼育している鶏肉の紹介を受けた。トウモロコシなどの従来飼料に比べて、脂肪が黄色みを帯びているが、味が良く、評判の良いことが報告された。

トウモロコシと玄米見目違えど同じ栄養

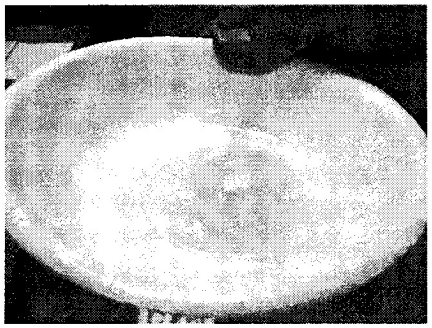
また、その際、トウモロコシと国内産穀物との栄養比較も示され、トウモロコシと玄米が似た栄養成分であることが説明された。見た目は変わるが、栄養価としての問題はないのである。

その後、「JAやさと」のホームページを拝見したら、関東で初めての特定JAS認定を受けた地鶏を育てているということである。

これらは3月19日にJA東京南新宿ビルで開催された「飼料向け稲・麦生産と循環型地域農業に関する学習討論会」で得た情報である。この会は、東都生活協同組合が呼びかけたもので、生協の友人に誘われて参加した。

その友人は、生協で産直事業を長年取り組んできており、現在の環境問題やエネルギー問題、食糧の自給率問題などの課題を抱えた農産物や畜産物とそれらの生産者との交流を通じて、新しい「耕畜連携の循環型地域農業の構築」を目指している。

現在、彼の考えている内容について、彼の提案書から抜粋して紹介したい。



飼料と畜産の給餌で自給率向上と再生を

「畜産・酪農家は家畜排出物を完全発酵させて耕種農家に供給し、農家は稲わらなどから作ったたい肥と合わせて活用する。この循環により消費者に安全良質な農畜産物を供給することができる。また、同時に、家畜排出物の良質たい肥化により水と土壌の汚染が抑制され、耕種農家も化学農薬や化学肥料の使用を抑制していくという循環を確立する。

また、生協や消費者段階での生ゴミ分別の徹底化により、飼料化と堆肥化を推進することで一層の地域循環が形成される。

そのような連携を一層進め飼料作物生産農家と畜産農家での給餌が実現できると、食料自給率の向上が可能となる。

さらに、家畜排出物のメタン発酵を通じて生成されるメタンガス活用による熱源や発電、さらにはエンジン燃料にまで利用拡大することも可能となる。このような食料自給率向上と再生可能エネルギーの持続的生産の両立を成立させた自然環境保全を総体として推進していきたい」―。

さて、この考え方は特別なものではなく、地域的に実現を図る努力がさまざまなところで試行錯誤を重ねているところであり、最終的にコスト問題がネックとなってとん挫している事例も多い。

しかし、今回の「学習討論会」で、呼びかけ人である千葉県の米作農家の方から、最後にまとめ、発言として示された話が特に印象を深めた。

「なんとなくこのような話は以前から聞いていたが、トウモロコシの高騰と鶏卵関係や飼料米の話などとエネルギー問題を身近に感じる時代になっている。千葉県は湿地帯での水田が多く、二毛作もできない地域が多く、米麦という田畑の有効利用は他人事のように考えていたが、私たち自身が何かをしなければいけないと感じている」。

つまり、農家においてもエネルギー問題を肌で感じる時代になったということである。

耕畜連携というが、畑作あるいは水田耕作農家と畜産農家は同じ農家というが、営農の方法も異なり、お互いが専門家であるがゆえの連携が少ないのが実態である。

また、国の米作に関連する政策は、国産米の過剰とそれに伴う減反政策、また政策的に輸入せざるを得ない外国産米の処理にかかわる費用などがかさむことから有効なる施策が生まれにくい状況にある。つまり、多用途多収穫米などの研究や推進という政策には反収26俵という米があるそうだ。

今後の食料自給率向上、あるいはエタノール製造に回ることによる米国産や中国産の飼料用トウモロコシの不足と価格高騰の問題を解消するための飼料用米を考えると、品種改良による多収穫性向上を図らねばならないのだが、それらの取り組みがしづらい状況がある。

さらに、畜産の中でも肉牛育成への飼料供給は政策面で恩典が多いが、養鶏への飼料供給での恩典は低めに抑えられているなど、価格の優等生であった鶏卵の先行きに不安が残るという意見もあった。

しかし、そのような状況の中でも、今回のような「討論会」が開催され、参加者一同が同じ考え方を共有し、耕畜連携の取り組みを深化させていく方向性が出てきたことは、「先行きが明るいということか！」と一人合点だが、なんとなく納得した一日であった。

トウモロコシと国内産穀物の栄養成分比較

品　別	水　分	粗たんぱく（消化率）	粗脂肪（消化率）	粗繊維（消化率）	粗灰分
トウモロコシ	13.6	8.0（70%）	3.8（94%）	1.7（0%）	1.3
玄　米	13.8	7.9（70%）	2.33（84%）	0.9（70%）	1.4
小　麦	11.5	12.1（84%）	1.8（814%）	2.4（47%）	1.7
大　豆	11.5	36.9（92%）	18.9（84%）	5.5（74%）	4.9

ＪＡ野菜と鶏肉生産部会　作成資料より